

第2回講座補充レポート

「上手前副知事の講義で印象に残ったこと」

講師の長年の県職員及び副知事のご経験等を踏まえたお話は非常に地方の実態に即したものであり、どれも印象に残ったが、岐阜県の将来を考えるに当たって特に印象に残った事項は以下の2点であった。

1つ目は、岐阜県の長期構想の一つとしての県立高校の教育改革についてである。地元の人材の出口は高校教育であり、勉強が良くできる生徒はなんとなく東京などの大学に進学してそのまま就職して岐阜に戻って来ない。それでは人材が流出してしまうだけであるので、地域を背負う人材をどう岐阜に引き止めるか、あるいは、戻って来させるかということが議論され、高校の進路指導担当に意識付けを行ったということであった。この高校教育と人材の流出の問題については私自身の経験からも非常に納得できるものであった。私の通った岐阜県内のある県立高校も、進学重視で進路選択に当たって地元への貢献などは一切指導がなかったように思う。実際に地元を離れて違う地域の大学などに進学すると、周りも地方出身者（地元に戻らない）が多く、周囲の影響を受けてそのまま都会に就職してしまい、そのまま家族を築いて人生の拠点を移してしまうケースが多いように思われる。そういった流れを変えるために高校時における進路指導のあり方を変革することは大変重要であると感じた。また、更に言えば、中学校時の高校選択に当たっても、地元へ貢献するための知識や技術を習得できる高校はどこなのかといった観点からの進路指導が行われるべきであると考えた。

印象に残った2つ目は、田舎の伝統を守ろうとするほど新規の転入者は来なく、また、転入して来ても定着しないという問題である。これも私自身の経験から非常に腑に落ちるものであった。私の出身の県内のある町においても、今でも多くの祭りなどの行事が行われており、各家に順番で役割が回ってくる。現在私は県外で居住しているが、地元に戻った場合に、私自身はそういった役割を受けることに抵抗はないが、別の地（都会）で育った妻がそれを快く受け入れるとは考えがたい。妻は田舎に住むこと自体には賛成だが、完全に田舎人になりたいとは思っておらず、その自然や静かな環境の中で生活し、子育てをしたいだけである。もし行事の役割なども全て巻き込まれるという条件であれば、妻から岐阜への転居に賛成を得ることが難しくなりそうである。そういった意味において、講師が指摘していたとおり、転入者を完全にその地の住民として染めることは難しく、転入者に無理を感じさせないバランスの取れた地域づくりが今後の地方の人口減少対策には重要となると感じた。

(以上)